

農業・農村と

地域再生

Serial **3**

農産物直売所 「めっけもん広場」

今回は、農産物を地産地消で提供し、農家と消費者を直接つなぐ農産物直売所の取組についてみていきます。農産物直売所は、1990年代に全国的に開設が進みました。農家は市場価格の低迷から新しい販売ルートを探し、当初は、個人や地域の農家グループが開設する小規模な形態でしたが、2000年代に入ると、JAなどが開設主体の大規模な「ファーマーズマーケット」や観光客が利用する道の駅に、地域振興施設として農産物直売所が併設される形態が増えていきました。今では地域内外の消費者が、地場の新鮮な農産物を購入できる場として定着しています。

和歌山県北部にある「めっけもん広場」は、JA紀の里が開設した大型農産物直売所です。JA管内の紀ノ川の中流域では、古くから稲作が行われ、戦後は日当たりの良い傾斜地で温州みかんなどの果樹栽培が行われてきましたが、減反政策や農産物価格の低迷などにより、農家は栽培品目の転換を行い、果樹を中心に多品目の商品作物が生産されるよう

になりました。一方、大規模農家が少なく、和歌山市など都市部に隣接する立地から農業の兼業化が進んでいきました。このような小規模な地域農家の収入確保のため、2000年にめっけもん広場が開設されました。少量多品目の農産物が周年供給されるこの地域固有の生産事情を反映し、売り場には野菜や米、果実、花卉など、豊富な品揃えの農産物が並び、安価で新鮮な農産物を求めて県内外から多くの来場者があります。2022年度の実績をみると、コロナ禍に配慮し入場制限を設けた運営でしたが、約56万人が来場し、販売金額は25億円と西日本有数の農産物直売所として持続的な経営を続けており、高齢化する地元農家など出荷者1、671人の重要な販売ルートとなっています。

全国的にも早い時期から大規模な直売事業を始めたためめっけもん広場は、先駆者としてさまざまな取組を行ってきました。安全・安心な農産物供給のため、出荷農家は栽培防除日誌を作成、JAによる栽培履歴の点検、残留農薬の検査が行われています。

また、売り場では食育ソムリエの資格を持つ職員が来場者の質問に答えるとともに、いち早く導入したPOSシステムで農家は販売状況を把握し、追加搬入の際には農産物を介して来場者との交流が生まれています。さらに女性の加工グループにも商品開発や販売の場を提供しています。本稿では、開設から20年以上経過するめっけもん広場を取り上げましたが、地方には多くの農産物直売所ができています。そして、直売所を核に、特色ある食や農の体験活動が行われ、都市住民と農家の交流の場になっています。最近では、市場を介さない農産物流通が進展し、都市のスーパーマーケットでも居ながらにして地域の直売農産物を購入できるところになってきました。しかしながら、農業の現場である農村の直売所を訪れ、地域ならではの農産物を手に入れるとともに、それを育んだ風土に触れ、食の体験や農業体験に参加して農家と出会い、直接話をする機会をもつことも意義があると考えます。

また、売り場では食育ソムリエの資格を持つ職員が来場者の質問に答えるとともに、いち早く導入したPOSシステムで農家は販売状況を把握し、追加搬入の際には農産物を介して来場者との交流が生まれています。さらに女性の加工グループにも商品開発や販売の場を提供しています。本稿では、開設から20年以上経過するめっけもん広場を取り上げましたが、地方には多くの農産物直売所ができています。そして、直売所を核に、特色ある食や農の体験活動が行われ、都市住民と農家の交流の場になっています。最近では、市場を介さない農産物流通が進展し、都市のスーパーマーケットでも居ながらにして地域の直売農産物を購入できるところになってきました。しかしながら、農業の現場である農村の直売所を訪れ、地域ならではの農産物を手に入れるとともに、それを育んだ風土に触れ、食の体験や農業体験に参加して農家と出会い、直接話をする機会をもつことも意義があると考えます。

わだ い
浪 切
サ ロ
第 153 回

教養としての和菓子文化

- 話題提供者 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 客員教授 鈴木 裕範
- 開催日時 2024年1月17日 水 19:00 ~ 20:30
- 参加費 無料
- 開催方法/申込 南海浪切ホールでの対面講演とオンライン配信。QRコードからお申込ください。



講演内容など詳細は「和歌山大学 岸和田サテライト」のホームページでご確認ください。
お問合せ 和歌山大学岸和田サテライト TEL / FAX : 072-433-0875

岸和田サテライト

検索